

令和4年度第2回京都市図書館協議会摘録

○日 時：令和5年3月23日（木）

午前10時00分～12時00分

○場 所：京都市生涯学習総合センター 3階 第3研修室

○出席委員：[8名中6名出席]

岩崎 れい 委員

小沼 薫 委員

小野 恭裕 委員

梶川 敏夫 委員

後藤由美子 委員

高田 敏司 委員（五十音順）

○欠席委員：2名

○傍聴者：0名

1 開会

(1) 中央図書館長の挨拶

- ・ 今回の図書館協議会にもご協力いただき感謝申し上げます。
- ・ さて、本日の報告事項等に入る前に、書店の話をさせていただきたい。全国にある書店だが、この10年間で約3割減った。これには、人口減少による経営難や活字離れ、スマートフォンの普及など、コロナも含めた様々な要因が考えられるが、もっと根幹のところである「本を読む」ということ自体が侵されているのではないかと考えている。
- ・ 昨年の調査であるが、各市町村において書店が存在するかの問いに対し、全くないと回答した市区町村が26%、1件あると回答した割合が46%との回答があった。それでは、なぜ書店が潰れるのか、それには書籍販売において利益が非常に少ないことやコロナによる不安定な状況が続くことで読者離れが進むことなどが要因として考えられる。
そういった、書店数の減少などにより、図書館のニーズが高まるため、図書館を運営する側としては、より一層随所に気を配り、適切な手段を尽くして、図書館へ来館いただくことが、益々社会的に重要な意味を持つようになってくると思う。
- ・ そういった中で、今年度2回目の開催となる本日の図書館協議会も、皆様の貴重なご意見をいただく機会である。ご意見・ご発言をありがたく受け取り、これからの審議等に生かしていきたいと考えているため、本日も活発な議論をよろしく願います。

2 報告事項

(1) コロナ禍における京都市図書館の利用状況等について

事務局から、資料に基づき、コロナ禍における京都市図書館の利用状況について報告をした。

令和4年度の月ごとの利用状況（①貸出冊数全体、②貸出冊数のうち児童貸出冊数、③入館者数、④入館者数（～17：00）、⑤入館者数（17：00～））をコロナの影響がなかった令和元年度と比較した。

なお、2月はいずれの数値も大きく下がっているが、これは5年2月に図書館システムの更新作業に伴う全館臨時休館が9日間あり、開館日数そのものが令和元年度の約3分の2となっ

ていることによるものである。

貸出冊数については、元年度の数値に近づき、特に児童は、元年度を超える月もあり、2月の数値を入れても、98.0%まで戻ってきている。

しかし、入館者数については、未だ元年度の数値を大きく下回っている。17:00からの夜間の入館者は開館時間を短縮したことも要因として低い数値であるが、17:00までの入館者も82.7%であり、貸出は元年度並みであることを考えると、貸出以外の目的で図書館を利用しておられた方が、まだ、ご利用していただきにくい状況であると考えている。

令和3年度の状況に比べると、いずれの数値も上がっており、来年度、また以前のように図書館をご利用いただけるよう考えていきたい。

年代別の貸出冊数の元年度との比較については、児童の中では、特に6才までの層の利用が元年度より多くなっている。高校生と23才から上の50才までの層が90%程度、61才から70才の区分のところ、特に、大きく下回っているが、これは令和2年度から同じような状態で、要因は、人口の年齢構成によるもので、団塊の世代といわれる1947年～49年生まれの方が、令和元年度は69才・70才で、令和2年度以降、71才以上の区分に移っていったことにより、61才から70才の人口が元年度比88%、71才以上の人口が元年度比108%と、母数自体が大きく変化したことによるものと考えられる。

コロナ下における図書館サービスについては、対面での行事や密になってしまうサービスが難しい中、各館とも工夫して取組を進めてきた。お楽しみ会などの行事が難しい、再開できても人数を絞ってという状況であったが、本の福袋やブックリサイクルなどの取組を拡充していった。中央図書館では対面朗読や「あたまいきいき音読教室」を、Web会議システムを活用してオンラインで実施する工夫や、インターネットを通じたサービスとしては、Twitterでの情報発信の充実に加え、醍醐中央図書館ではYouTubeでの動画配信を開始した。また、国の臨時交付金を活用して書籍消毒器を全館に設置するなど、利用者の不安も少しは解消できたと考えている。

来年度、状況は改善していくものと期待しているところであるが、こうしたコロナ下において試みた取組については、引き続き継続していきたいと考えている。

(2) システム更新に伴う新サービスの開始について

事務局から、システム更新に伴う新サービスの開始について報告をした。

京都市図書館では、5年に1度、図書館システムの更新を行っており、今年度は、その更新の年にあたり、10日間の臨時休館の後、2月10日からサービスを拡大させて本稼働した。新しいサービスについて大きく5点紹介させていただく。

1つ目は電子書籍サービスについてである。これは、インターネット環境があれば、自分のパソコンやスマートフォン、タブレットから24時間いつでもどこでも利用できることが、最大のメリットであり、文字の拡大表示や音声読み上げ機能も充実しているため、高齢者や視覚に障害のある方も利用しやすく、様々な理由で図書館に来ることが困難な方にも読書の機会を提供できるようになった。

コンテンツ数は3,600点からスタートし、現在は3,768点となっている。貸出はひとり2点2週間で、予約は2点までである。市民の皆様からの反応は、資料にも紹介しているとおり概ね良好で、初日、9時半からのサービス開始とほぼ同時に、貸出や予約が見受けられ注目の高さを感じた。また、サイトのトップページでは、色々なテーマの特集を組んで書影を

掲出しているが、やはりトップページで紹介しているものに貸出、予約が集中するため、現在トップページに「今すぐ貸出できる本」というボタンをつくり、そこから本を選んでもらえるようにしている。初日は利用者の方の好奇心も手伝って、ログイン件数5, 973件、貸出回数1, 769件(スタート1時間で300件)、予約1, 552件と高い数値であったが、その後、利用は落ち着き、現在は1日平均200点前後となっている。

2つ目は、スマホ図書館カードの導入である。これにより図書館カードをスマートフォンで表示して貸出できるようになり、カードをお忘れになっても、本を借りることが可能になった。

3つ目は、京都市図書館のホームページを、パソコン、スマートフォン、タブレット等の端末でも見やすくするため、画面サイズに合わせて表示できるように対応した。

4つ目は、音声読み上げや色の変更、英語・中国語・韓国語への変更など、自分にあった方法でホームページを利用できるよう、ホームページに読み上げ・自動翻訳機能を追加した。

5つ目は、「シリーズ予約」という機能を追加することで、これまでは、貸出中などの理由により、予約をしてもシリーズ本(1巻～○巻など)を順番通りに借りることが出来ない場合があったが、「Myライブラリ」で「シリーズ予約」をすることで、利用者自身が指定した順に本を借りることが可能になった。

その他、システム更新中の臨時休館を利用して、各図書館では必要に応じコーナーのリニューアルを実施した。主なものとして、右京中央図書館では、京都の事をもっと気軽に多くの方に知ってもらおうと京都大百科事典ゾーンを拡張して「京都が舞台のマンガ・小説コーナー」を開設した。また、中央図書館では、2階ブラウジングコーナーに新しく「子育て本コーナー」を開設し、子ども連れの方でも、落ち着いてゆっくり本を探すことができるコーナーとなっている。

(3) 第4次京都市子ども読書活動推進計画の取組について

事務局から、資料に基づき、第4次京都市子ども読書活動推進計画の取組について報告をした。

京都市教育委員会は、平成16年から「子ども読書活動推進計画」を策定し、5年ごとの改訂を行っている。現在は第4次京都市子ども読書活動推進計画に基づき、様々な取組を行っているが、本日は①子どもの本コンシェルジュの養成、②京都市図書館と高等学校の連携の2点について報告する。

① 子どもの本コンシェルジュの養成について

システムの更新にともない利便性の向上は進むが、図書館サービスを行っているのは、やはり「人」であり、京都市図書館でも職員の育成に重点を置き、図書館サービスの柱の一つである児童サービスを牽引するリーダーの育成を目指している。

令和元年から講座を開始し、令和5年4月からは1期生11名、2期生とともに、総勢18名で活動を始める。

コンシェルジュの主な取組として醍醐中央図書館の「ジュニアライブラリアン養成講座」について説明する。子どもの本コンシェルジュにとって、フロアワークなどで子どもたちに読書の楽しさを伝えるとともに、図書館の役割を知ってもらうことも重要な仕事であり、小学生高学年から中学生を対象に5日間の講座を開き、本を紹介するPOPやレファレンス業務の報告書作成、本の修理等を通して図書館のバックヤードでの仕事を体験してもらった。

ジュニアライブラリアンに認定された子どもたちには、その後も図書館での催しの手伝い

をするなど、継続的に活動を行ってもらっている。

その他にも、書店と連携し、今年1月に丸善書店で開催されたヤングアダルトフェアで本を紹介したり、学校との連携で、「読み聞かせ講座」や「ブックトーク講座」の講師を務めるなど、活動の幅を広げている。

(4) 京都市図書館と高等学校の連携について

事務局から、資料に基づき、京都市図書館と高等学校の連携について報告をした。

ティーンズ世代という言葉は自分自身を作り上げるうえでも大切なこの時期に、その子どもにとっての1冊と出会えるよう、図書館でも近隣の学校と連携して様々な取組を行っている。

第4次京都市子ども読書活動推進計画では、特に読書離れが進む高校生に焦点をあてており、下京図書館、東山図書館の2館を選び、それぞれ京都市立堀川高校、日吉ヶ丘高校と連携を進めているところである。

- ・コロナ下ということであるように連携が進まないところもあったが学校に出張して図書館カードの作成をしたり、高校生からのリクエストを受付けて購入したり、ティーンズレターを発行するなど様々な取組を行ってきた。

- ・連携を本格実施する前に行った高校生へのアンケートでは、課題を見つけることができたため、図書館側からのより一層のPRや広報の工夫をはじめ、令和5年度に向けて、新たな取組を考えていきたい。

3 報告事項に関する質疑応答

意見 スマートフォンの普及や電子書籍の導入など、時代は大きく変わっている中でも、「人」と「人」のつながりが基本である図書館本来の仕事をぜひ深めていただけたら嬉しい。

各図書館では、赤ちゃん向けの読み聞かせなど、様々なお楽しみ会があるが、ブックトークなどが少なく感じる。赤ちゃんの絵本を親子や読み聞かせで楽しむ時期から、その次のステップである幼年童話のような読み物へどのようにして誘っていけばいいのかが難しい。小学生向けの本の紹介や読み聞かせなどを図書館で定期的実施してほしい。

電子書籍を利用した方からは、重たい児童書や絵本を持つ必要がないため、助かるとの声もあるが、読上げ機能について、コンテンツによって読み間違いや不自然なアクセントがあると聞いている。

意見 令和5年度の電子書籍サービスに関する予算やコンテンツの単価は？府立図書館の電子図書サービスとの住み分けは？

回答 約600点の新規コンテンツ購入を想定して予算を計上している。コンテンツの単価は4,000円程度で、紙の書籍に対して2倍ほど高い。

府立図書館の電子書籍サービスは、個人への貸出しではなく、閲覧するシステム。そもそも、府立図書館自体が、一部必要な所を閲覧する、参考にするなど、調べものの資料や書籍の所蔵が多いため、電子書籍もそういったものを主としている。

市町村の図書館については、読み物をはじめとした通読することを前提にした図書を多く揃えており、電子書籍もそのようなものが多い。

意見 電子書籍での閲覧と貸出しの違いは？

回答 閲覧の場合は、見たい時にコンテンツを見て、必要なくなれば閉じる。その方がコンテン

ツを閉じれば別の方がコンテンツを見ることができる。貸出しの場合は、途中で閉じても再度読み始める時は続きから読むことができ、貸出期間中は他の人が読むことができない。

意見 子どもの本コンシェルジュは希望する図書館とのマッチングなどはしているのか？

回答 今年4月からは18人となるが、各館に1人の配置は実現しておらず、マッチングのようなことはできていない。人数を増やすとともに、認知度を上げて、どのように活動していくかが、今後の課題。

意見 コンシェルジュを増やし、図書館とのマッチングの仕組みが構築されれば、効果的な活用につながると思う。

高等学校との連携事業も素晴らしいが、市立高校だけでなく、府立高校などとも連携できればより良い。高校生はインターネットなどをよく利用するため、電子書籍サービスの周知を行うことで、より読書の機会を創出することができる。

意見 コロナ下で大学図書館が利用できないと、他の方法を模索せずに図書館の利用を諦める学生がいた。インターネットが主流になっていて、紙の書籍を手にする学生も少なくなってきた。コロナの前と後とで社会は大きく変わったため、公共図書館の利用の仕方についても考え直さないといけない時期。図書館が遠い存在となっており、工夫して魅力を伝えることが大事。

意見 電子書籍の選書基準について、府立図書館が学術的なものを扱うのに対し、京都市図書館は市民からニーズが多くありそうな読み物などを選書しているのか？

回答 京都市図書館の電子書籍サービスでは、文学が1番多いジャンルである。

回答 電子書籍を提供する業者によって、扱うコンテンツのジャンルが異なり、府立図書館が導入した電子書籍の業者は学術的な資料・書籍が多く、京都市図書館が導入した電子書籍の業者は読み物を多く取り揃えている。

意見 電子書籍以外の書籍も、府立図書館と市立図書館は基本的に住み分けているのか？

回答 府立図書館は府内の市町村立の図書館を支援する役割があり、市町村立に少ない調べ物に使う資料が多い蔵書構成になっている。

意見 京都市図書館は、大学にあるような資料は、あまり所蔵していないのか？

回答 大学図書館との連携により対応しており、大学図書館の個人への貸出しができない書籍でも、図書館同士で借受け、その公共図書館内で閲覧してもらえるサービスも行っている。

意見 大学図書館が所蔵している本は京都市図書館のホームページから検索できないのか？

回答 府立図書館が構築しているネットワークを活用し、検索することができる。ご自身で検索して見つけることが難しい場合、市図書館に相談いただければ、大学からの借受も含めて司書が対応させていただく。

意見 そういった利用の仕方などをもっと分かりやすく周知すれば、高校生や大学生ももっと公共図書館を利用すると思う。

高校生向けの本や雑誌とは、具体的にどのような書籍なのか？

回答 ティーンズコーナーを全館に設置し、紹介しているが、ティーンズ向けと限定されているものばかりではなく、一般的な書籍や児童書の中にも、ティーンズが読んで面白いと感じる本もある。図書館司書が全体の中から、読んでもらいたいという本を集めている。

意見 絵本を読む時期から小学生向けの児童書へ移行することが難しいという意見があった。図書館の配架では、赤ちゃん向け、幼児向けはコーナーで分けられているが、小学校以降の本は、低学年向けといった分けはされていない。年齢別などに分けてもらえたら、子ども自身も手に取りやすくなると思う。

回答 全館ではないが、絵本から読み物に移行する子どもたち向けに「初めて出会う物語の本」というコーナーを設けている図書館もある。

意見 高校生の不読率について、電子書籍はその改善策の一つとなる。高校生向けの本をはじめ、様々なジャンルのコンテンツが増えることで、高校生の利用も増加していくと考える。

子どもの本コンシェルジュは、本人が思ってもみないような本との出会いを創出させる素晴らしい取組だと思う。

大学との連携については、書籍を探したり、借りたりが、インターネット観光の進展によって昔よりも便利になっている。大学生が必要としたり、興味を持ったりするような書籍や雑誌を充実することで、さらに使い勝手が良くなると思う。

4 協議事項

新たな図書館に求められるサービス・機能について、事務局から以下のとおり説明した。

この間、本協議会では、行政改革計画に掲げられた「図書館の統合・再配置」についてご意見をいただいていた。京都市の令和5年度予算では、新たな借金をつくらずに予算を組むことができたが、引き続き京都市の財政基盤を安定したものとしていくことが求められている。こうした下、「図書館の統合・再配置」を具体化するかは、これからの検討になるが、そういった形ではなくても、今ある図書館も相当の年数がたっており、今後、図書館を建て替え、新しい図書館をつくっていくことを検討する必要がある。

については、これまでは京都市の厳しい財政状況を前提としたご協議をいただいていたが、今回は、その前提を一旦離れ、今後、新しく図書館をつくっていく際に、どのようなサービス・機能を取り入れていくことが必要か、施設・設備についての意見も含めて、自由にご提案いただけたらと思う。

5 協議事項に関する質疑応答

意見 八幡市には古民家を改装した地域や子どもたちの憩いの場があり、そこには図書館もある。色々と自由な遊びができ、子どもたちが集まっている。そういった機能や機会を設けることで、図書館に集まるきっかけになるのではないかな。

意見 八幡市の図書館には児童専門の司書がいて、一人ひとりの子どもに、丁寧にじっくりと対応されている。醍醐中央図書館でも、イベントやお楽しみ会などの決まった日だけでなく、図書館に行けばいつでも子どもの本コンシェルジュに読み聞かせをしてもらえるとといったことを試験的にしていると聞いた。そういった環境が他館にも広がれば良いと思う。

また、中央図書館でのバリアフリー絵本展など障害のある方に向けての取組も、是非定期的に実施してほしいし、他館にも広がってほしい。

電子書籍は、図書館を普段利用しない人も興味を持つだろうし、電子書籍のタイトルを見ると、英語の教本的なものや、学習参考書的なもの、おもしろ入門的なものもいろいろあり、そういった本に接する機会のないような中学生にとっても、無料なら借りてみて出会える機会になるだろう。参考書も買えない、という子はたくさんいるはずで、公共ならではの仕事だと思う。しかし、電子書籍は契約が切れると読むことができなくなったり、期間や回数制限のあるものがあると聞いたがどういう仕組みなのか？

回答 電子書籍は、コンテンツ自体を購入しているのではなく、使用ライセンスを購入しており、

契約してる間だけ、図書館がそのコンテンツを一般の利用者に提供できる。ただ、コンテンツの中には、2年間など期間が限定されているもの、貸出回数が52回までと限定されているものなどがある。期間が限定のないコンテンツは、期間・回数制限のあるものより少し安価ではあるが、最新の書籍でないことが多い。

意見 大学生たちが、本のジャケ買いをして装丁を楽しんでいたりする一方で、調べ物をする時はオンラインでいいといったように、若い人たちは、「情報」は「情報」だけを純粹に求め、「物」は「物」として捉えるなど使い分けをしていると思う。ティーンズコーナーについては、子どもたち一人ひとりによって、興味のある本が違う。絵本などは、親や大人が読聞かせをしたりして、同じようなところからスタートするが、小学校中学年・高学生となると、興味のある本が分かれていくため、多様なニーズに答えていくことが難しいと思う。

回答 年齢などによる区分だけで、その本を読むように促しても興味をもたれないし、電子書籍もティーンズ向けのものでたくさんあるわけではない。高校生のアンケートでは、部活や勉強で忙しく図書館へ行ってないが、興味のある本があれば行くという回答があり、どのように動機づけするかが課題。醍醐中央図書館では、館内のリニューアルをして、ティーンズコーナーを広くするとともに、一人の世界に集中できるような座席を設ける工夫をするなど、ティーンズが居心地の良さを感じてもらえるよう試行錯誤している。

意見 高校連携は、市立だけでなく府立や私学を含めて色々な学校と連携することも大切。実際に図書館に足を運んでもらい、「このような資料があるんだ」ということを知ってもらう中で、ネットにはない、本の良さというのをもっとアピールしていくことも重要。高校入学時に行う、「図書館オリエンテーション」などで、学校図書館のほかに公共図書館や国会図書館、大学図書館との連携についても発信していくことができれば良いと思った。

意見 公共図書館の詳細検索の使い方や府立図書館や国会図書館、大学図書館との違いについて、もっと早くに知っていれば、趣味はもとより、学習の際に効率的に図書館を活用できたのではと思った。若者にとっては、ネットで購入すればすぐに届き、電子書籍もお金さえあれば自分で買うことができるので、図書館にわざわざ行くことや電子書籍で予約を待つことは面倒に感じると思う。図書館をアピールするのであれば、他の図書館との連携により様々な資料を全国から取り寄せることができるという点や効率的な検索の方法という情報を若い人に向けて、もっと押し出していくことが重要。

回答 現在の図書館の多様なサービスについて、知っていただけていないということを感じている。高校生にも図書館のことをよく知ってもらえたら、彼ら自身にあった使い方を見つけられるのではないと思う。京都市図書館の蔵書構成がどのようになっている、何か調べたい時に、どういった方法で調べることができるのかや、全国の都道府県や大学などとのネットワークも活用できるということも、もっと発信していかなければならない。

意見 様々な情報が簡単に手に入る時代の中で、図書館に求められているものが、従来どおりの子どもへのサービスや趣味のための本を借りるといったことだけではなく、学びとか情報を得るために、自分ではできない、より高度な方法を教えてくれることというように変わってきている。そういう中で、図書館がどういう情報を発信するかという点についても新しいことが求められている。若い人たちは、実は読んでいるが図書館は使わない人という層も結構増えてきていると思う。そういう人たちに図書館の魅力、図書館は何が提供できるかということも発信することも必要。

小学生まではよく本は読むが、中高生になると急に読まなくなることはよくある。小学校までに読む力がついていると、中高生になって多少忙しくても、また時間ができれば本に戻

ってくるので、結局は小学校までの読書習慣が大事といわれる。

いきなり小学校で読むことを教えてもらったからといって読めるわけではないので、読んでもらう時期が必要なのかなと思う。

フィンランドでは、小学校時代は読んであげるのが普通で、子どもが読んでもらわなくていいよと自分から言い出すまでは読んであげましょうというようになっている。日本では自分で読める方が読んでもらうより、偉いみたいなのところがあって、それで保護者の方は自分で読めるようになったら、自分で読ませてしまう。

平仮名の拾い読みみたいなのでは少ししんどい時期に、もう自分で読めるでしょというのではなく、本は読んでもらうというものだったら、読んでもらうと楽しい。でも、自分でも少し読めるものもあるというような、両方がある時期を経験することによって、すらすら読めるようになる。

先ほどご提示いただいた絵本を読んでもらう時期から自分で読む時期への移行というのがなかなか難しいのではないかとというようなことについて、図書館のサービスとしてはどんなことができるか、この移行に際して、公共図書館に何を求めるかというような視点でご意見お伺いできればと思う。

意見 ブックスタートはありますが、その後、どこに向かえばいいのかがよくわからないというのが現状です。本よりも体を動かす方が好きな子に、図鑑とか、虫の本とかそういうものを与えて、それは読んでも、長い話、ストーリーを読むっていう態度が身につかないようで、困った。小学校入学時にもブックスタートみたいなのがあって、こういう本を読んだら面白いというのを教えてもらえればと思う。

回答 京都市図書館で作っているブックリスト「本のもり」は年代別に6段階になっていて、小学校の低学年編を、全ての小学校1年生に学校を通じて配布しています。子ども文庫の方にもご意見いただきながら、リストを作っていますので、参考にさせていただけると思う。

意見 本を読むというのは、お話を楽しむっていう所がすごく大事。自分でたどたどしく文字を読むのではお話は楽しめないなので、物語は、初めは人に読んでもらうことが必要。自分で読むという時期の前に、いろんなお話を聞いて、面白かったとかドキドキワクワクして、また話してほしいと思うような体験、それなしには読めないと思う。

絵本だったら語ってくれるの聞きながら、絵を見て、その文の中にないものまでそこに見つけたりするんですけど、絵本ではない時はもっと自分の頭の中で、その絵も場面も考えるわけです。そういう脳の働きっていうのは本当に大事だと思う。

文字が読めたらもう読めるだろうし、自分で読むのがダメではないけれど、読んだというだけで楽しめてないのではと思う。

図書館に望むことは、子どもが来ないと言わずに小学生向きのお話会をぜひやってほしいと思う。空振りでもいいので続けていって、物語の時やら、科学読み物の時やら色々あっていいと思う。

意見 ブックスタートは、発祥のイギリスでは、就学時まで追っかけるというようなことをやっている。必ずしもブックスタートだけじゃなく、いろんなものを組み合わせるっていうことも可能かと思う。

小学生に一人でも来てもらうのは難しいので、学校以外でも学童クラブ、児童館とも連携するとか、いろんな方法が模索できるのかなと思う。

意見 大事なのはやはり雰囲気です。いかに人が来ていただける雰囲気を持つか。新しい人との出会いとか、コミュニティとか、新しい図書館の計画には、そういった機能も中に入れてい

けばと思う。

そのなかで、将来自分が活動していく中でいろんな形で役立てるものを学習していく。来てくださえばっかりでは無理なので、いかに楽しくといったところに工夫が必要。

それから漫画。アニメもそうですが、日本を代表する文化になっている。自分は源氏物語を全部読んだことがなく、それで恥ずかしいなと思ったとき、一番よかったのは漫画です。源氏物語も漫画があって、大体の源氏物語の流れがわかる。それをまず参考にしながら、とっかかりを作っていたという体験もある。

意見 財政が厳しいと図書館のリストラといった考えがでてくることに、どうやって対抗していくか、守っていくかは、新しいコンセプトを出すということが必要と思う。そのキーワードはコミュニティで、京都のコミュニティの最初のベースは小学校区、次が中学校区、その次が区役所になると思うが、中学校区と区役所の間のところに図書館があって、なかなかよくできた配置だと思う。それを活かして、その文化とか福祉的なコミュニティとしての価値みたいなものも打ち出していないと、リストラ圧力に対抗できないのかなという風に思う。

回答 ハイティーンの人たちが、なかなか読まない理由を、忙しいからだと言ってしまうのは、対策がなくなってしまう。10代後半というのは、人生の中で一番はにかみというもののある時代。非常にナーバスになったり、羞恥心で頬を赤くしてしまったりという様なものが特色にあり、ただ図書館にどんなに来てくれと言っても、そういうこと自体がもう嫌だということなのかもしれない。どのように図書館がアプローチしたらいいかを、高校とのタイアップなども試みて、考えたい。

意見 具体的なお意見とか質問というのもたくさんいただきました。

高校生、大学生は、本を読まないという風言われてるけれど、その時期は孤独にその自分の内面と向き合う、あるいは読書をして、その体験を深めるといったような、そういうような経験が非常に重要な時期で、図書館がそれにあわせた魅力というようなものを出していくっていうのも1つの役割なのかなというように思う。

図書館に来てもらうということ自体が目的なのではなく、図書館に来てもらって、あるいは来館しなくても、何らかの形で使ってもらうことを通して、図書館が市民に何を提供できるのかというところがポイントかと思う。

来館しなくてもできるサービス、来館してもらってからこそできるサービス、あるいはどこかと連携してできるサービス、図書館は何をやる場所なのかというところの原点に立ち返りながら、新しい取組、従来から続けてやってきたものをもっと発展させる工夫もしていただければと思う。

皆様から色々なご意見ご提案をいただきましたので、検討いただきますよう、よろしくお願いする。

6 事務連絡

7 閉会